



「どうか間に合ってくれ」

一群となって馬を駆るその先頭で、軽装ながらも拵えの良い甲冑に身を包んだ者が呟く。

その言葉は雷鳴のような馬蹄の轟きに掻き消されたが、その思いは誰もが共有しているのだろう。鎧や武器に統一性はないが、その表情は一様に焦りの色が濃い。

先頭をひた走る横に、一人の偉丈夫が巧みに馬を操って並ぶ。

「兄者、あまり無理をなさらぬ方が」

背には長大な矛を背負い、纏った鎧には無数の傷が残るその姿は、まさしく歴戦の戦士のもの。だが、厳ついとも言えるその顔は、身なりの良い彼の身を案じてか居並ぶ者よりも曇っている。

。

「今無理をせずして、何時無理をする。私たちの存在意義はそのためにあるのだ」

激しく揺れる馬上にあり、なおかつ轟音とも言える馬の一群による蹄音に掻き消されることなく、良く通る声で自らの存在意義を主張する。その声は男としてはやや高かったが、華奢にも見える体を思えば、その高さにも納得はいく。

主張をする声を支えるのは、彼の心の在り様なのだということは、決意を秘めた目を見れば明白だった。

「わかりました。しかし、絶対に無茶はしないでください」

なおも身を案ずる偉丈夫に対して、兄者と呼ばれた者はくどいとばかりに馬に鞭を入れて速度を上げて引き離した。

まっすぐに前を見据える瞳に映るのは荒涼とした大地であり、目的である小邑はまだ見えない。

。

清香（せい）帝国の帝都より離れた中規模の邑、李川（りせん）にはいつになく多くの人が集まっていた。

馬を駆り、武装した屈強な男の姿が多く、邑に住む民は不安がったが、彼らの掲げる旗の印を目にするや、態度は目に見えて安堵の色を強くした。

そんな屈強な男たちの一団は馬を既に預け、とある人物の下へと集まっていく。

その中心となっている拵えの良い軽装の甲冑に身を包んだ人物は男たちがあらかた集まったのを確認すると、

「私たちはこれよりここ李川に駐留し、情報を集める。無論、私たちがここにいる以上、紅紗（こうさ）の奴らに好き勝手させることを見過ごすつもりはない。近隣に出没の報あれば、ただちに打って出る。よいな？」

彼の声はとりわけ大きいという訳でもなかったが、芯の通ったその声は男たちの耳にしっかりと聞こえ、そして、野太い声で応の一声が返る。それを聞いて中心の人物は微笑みを浮かべ、しっかりとした頷きを見せた後、駐留に当たっての支度を行うように命じた。

めいめいに散っていく中で、一際体躯の良い偉丈夫だけがその場に残った。彼は背中に背丈に見合った長大な矛を背負い、一見して武人とわかる風貌だ。

「白扇兄者。俺たちはどうします？」

武人は拵えの良い鎧を纏った者、白扇を兄者と呼ぶ。白扇一一姓を児辰（こしん）という一一は武人の顔を見上げ、

「そうですね、駕刻。まずは私たちも宿を探しましょう。その後、ここの代表者に目通りします」

治尚（ちしょう）駕刻（がこく）は黙して頷き、先に歩き出した白扇の後を付いて行く。

李川の邑は帝都や大邑のような賑やかさはないものの、道行く人々の穏やかな表情と身なりの程度から、かなり安定した執政がなされていることが窺えた。ひとえに、邑の政治を執り行う政官、とりわけ邑主が人格者だということだろう。

しかし、この邑こそ安定した暮らしを実現できているが、近隣の邑もそうであるとはとても言えず、最悪な場合、飢餓や疫病の類で邑が滅びることも多々ある。

また、その安泰を妬む者がいるのも確かなことだ。そんな者らが徒党を組み、賊となって村や邑を襲うことも多くなっている。そんな情勢の中で、官軍もただ黙っている訳ではないが、動きの鈍さと神出鬼没ともいえる賊に対する決定打のなさゆえに、手をこまねいている。

そして、その賊の中で昨今猛威を奮っているのが紅紗の連中だ。紅紗は当初こそ官軍の手の届かない辺境における義勇軍だったが、脱走兵や傭兵崩れが集まるにつれ、組織の精神は段々と曲がり始めた。そして、数年前に炉火と呼ばれるものがその頭となって以降、まさしくただの賊と成り果てた。それ以来、いくつの村や邑が襲われ、何百人もの人が彼らの欲望の犠牲となった。

白扇は賊が我が物顔で清香の土地を闊歩する彼らに対抗すべく、有志を集めて義勇軍を立ち上

げた。旗印には白扇の名に含まれる『扇』を用い、鮮華と名乗っている。立ち上げから一年と少し経った今、官軍やその他の義勇軍と協働して賊を討ち、民を守ってきた彼らはまさしく英雄と言えた。

そして、今現在白扇たちが李川の地に来ているのは、この邑の周辺で紅紗と思われる者たちの目撃情報があったからだ。

白扇は駕刻を共連れに歩き、宿屋を探そうと辺りを見回していると、鮮華に属する男の一人で李川の周辺を哨戒していた者が駆け寄ってきた。

「兎辰殿、たった今聞いた話ですと、数日前に北の李籠を襲った紅紗はその後西へと進路を取ったそうです」

「北の李籠？ 数日前だとして今から行ってもすでにいないだろう。李籠の西にはなにがある？」

「この周辺の状況はまだ詳しくわかりませんが、紅紗が無駄な進路を取るとは考えにくいのも事実です」

「確かに、な。そこの青年、少し良いか？」

白扇は通りを歩いていた平民の男に声を掛けると、無造作に歩み寄る。男は突然のことに面食らったようで、

「い、いきなりなんだ？」

と、落ち着きなく辺りを見回しながら答えた。白扇はその様子を疑問に思ったが、今はそれを詮索する時ではないと判断し、李籠の西になにがあるかを問うた。すると、彼は白扇の顔を直視しないまま、

「た、確か、李籠の西には小邑がある。名前はなんだったかな……えっと、ああそうだ。李庵だ。うん、李庵。そこがどうかしたのか？ 多分、行ってもなにもないぞ」

「いや、この周辺のことを知りたかっただけだ。情報感謝する」

「い、いや、いいさ。知ってることを喋っただけだから」

男はそそくさとその場を後にしたが、少し離れた位置で立ち止り、白扇の顔を何度も見返しては首を傾げていた。

白扇はそんな彼の行動には気付いていなかったが、その男の態度も頷けるものだ。白扇は軽装とは言えしっかりと甲冑を身に着けていたが、その体はどちらかというと華奢であるし、顔立ちは化粧をすれば女に見えなくもないほどである。

「兄者」

駕刻が言葉少なに白扇を促す。彼はそれへ頷きを返し、報告をしてきた男に人を集めるように命じ、自らは馬を繋いだ場所へと走り出す。

程なくして再集合した男たちの表情は険しい。到着早々再び呼び集められたのだ。何かがあったと考えるのが自然。そんな彼らへ白扇は、

「数日前、ここより北の李籠にて紅紗の目撃情報があったようだ。彼らはその後進路を西に取り、李庵という小邑の方へと向かっているらしい」

そこでいったん言葉を切り、白扇は胸に手を当ててから、

「李庵の状況は絶望的だ。しかし、今からでも追えば、足取りは掴めるものとする。足の速いものを選抜し、残り半数をここ李川に駐留してもらおうと思う。各隊長は部下を選抜し、すぐさま出立の準備をしてほしい」

白扇の声をかき消すほどの大きさに応答の声が返る。それへ満足げな頷きを返し、駕刻と共に出立の準備を始めた。

鮮華の構成員は白扇を盟主と置き、駕刻を総隊長、そして、その下に分隊を指揮する分隊長がいる。分隊は今のところ三つに分かれており、それぞれに騎兵と歩兵を有するが、各隊でその比率は異なる。騎兵戦力を多く有し、戦場での機動力を生かす第一分隊は佐料（さりょう）鈴（りん）という女性が分隊長を務めている。もともと別の義勇軍として活動していたが、白扇と通じるところがあり、今では肩を並べて戦っている。

歩兵を主とする第二分隊は袁（えん）理督（りとく）が率いている。もともとはとある邑で政官をしていたが、邑の財政が傾き、その役職を罷免されたところを結成直後の鮮華が拾ったのだ。聡明な男で、今では鮮華の財務を取り仕切り、軍師としてもそれなりに優秀である。

第三分隊は公（こう）修刑（しゅうけい）が率いているが、この分隊は少々特殊性が強い。第二分隊と同じく歩兵が多いのだが、その役目は主に諜報である。先ほど報告をしてきた男もこの分隊の者で、斥候や敵地への単独潜入を得意とした特殊な技能を持った者が多く属している。

このような者たちを囲っていることこそが鮮華の特殊性である。

白扇が支度を済ませて馬にまたがると、すでに第一分隊の者を中心として、およそ百五十人が準備を済ませ、白扇の命を待っていた。

「白扇、号令をお願いしますわ」

鈴に促がされ、白扇は腰から采配を抜き放ち、天に掲げた。

「これより紅紗の足取りを追うため、李庵の地へと向かう。可能ならば、李庵の地が紅紗の牙にかからぬうちに辿り着きたい。では、参るぞ！」

采配を振り下ろすと、進路を北西に取る。先頭を白扇が走り、その横に駕刻が付ける。その反対側には鈴と修刑の弟で第三分隊の小隊長である蒼刑が並び、道を知らせる。すでに蒼刑は近隣の地図を入手していたようで、馬を駆りながら、手元の繊維紙に目を走らせている。

「礫地帯みたいっすね」

軽い口調で言う蒼刑に視線を向け、

「回避できないか？」

「できないってこたあないすけど……」

彼は眉を寄せて一度視線を地図に落とし、

「そんなことしてら、見失っちゃいますよ」

「そうか。では、馬の脚に注意してもらおうしかないな」

その話を間で訊いていた鈴はすぐにその内容を後続へと伝えていく。騎馬隊の隊長だけあって、馬の扱いは素直に賞賛に値するが、今は悠長なことをしている場合ではない。一刻も早く李庵の地に向かい、可能であるならその地を救わなければならない。

馬を駆り、一刻と少しを歩き、少しの休息で馬を休ませ、また長い距離を駆ける。馬の疲労は

勿論だが、その乗り手の消耗も馬鹿にならない。

焦りが産む汗が掌を濡らし、手綱を持つ手を滑らせる。いくら鞍を置いていても、動く馬上では体勢を整え続けるのは流石に辛い。

そうして更に二刻を歩き、休息の頃には中天にあった陽が西に傾いたころ、ようやく集落の影を捉えた。

「蒼刑、あれか？」

問うと、無言で頷き、彼は目を細めて遠方を見る。

「っ！ この臭いは――」

風が向かい風に変わり、その中に混じる嗅ぎ慣れた、しかし、決して慣れたくない臭いが鼻腔をかすめる。そう、まぎれもない血の生臭くも鉄錆のような臭い。

合図をするまでもなく、馬軍はさらに速度を上げた。

しかし、視覚と嗅覚が一致しない。

「火がない。不自然ね」

鈴の言う通りだ。紅紗のような野盗なら、邑に火をかけ、人を炙り出すのが常套なのに、だ。

違和感を心に抱いたまま、四半刻もしないうちに白扇たちは李庵の地に辿り着いた。

白扇は馬に乗ったまま、李庵を囲む簡易な柵へと足を向ける。そこに在ったのは、裕福ではないものの、いたって普通の小邑の姿。略奪の後はおろか、野盗が訪れた気配すらない。突然現れた馬軍に驚いて、警戒をする様子はあるが、それ以外は普通だ。

白扇は血の匂いが未だ漂っていることを確認しながら、慎重に馬を降り、辺りを探る。

蒼刑は耳を澄まし、周囲の音を探っているようだが、伏兵のようなものはいないらしく、頭を振った。

「どういうことだ？」

背後に歩み寄ってきた駕刻に問うが、彼も困惑を隠しきれず、

「わかりませぬ。ただ、血の臭いがあることは確か」

鮮華の人員も少し足を伸ばして周囲を見て回るが、この周辺を馬が通った形跡はない。普通に考えれば迂回した、と思うべきなのだろうが、それにしても血の臭いが濃すぎる。

「駕刻、あの岩の方へ行ってみよう。丈もあるし、周囲を探るのにはいいだろう」

「わかった。蒼刑、お前も来い。佐料殿はこの周辺の警護を」

「あいよ」

「わかったわ」

それぞれに返答が返り、白扇は改めて馬にまたがる。目的は李庵の入り口から少し離れたところにある巨岩だ。

馬にこれ以上無理をさせるのは帰りに響くので、並足で行く。

近付くにつれ、血の臭いが濃くなっていることに気が付き、速度を落として警戒する。

駕刻も無言で矛を抜き放ち、周囲を警戒する。

「蒼刑？」

蒼刑の耳が何かを捉えたらしく、彼の視線が突如跳ね上がる。

「いる」

つられて白扇が巨岩の上を見ると、そこには確かに誰かがいた。

西日に照らされた人影はゆるりと立ち上がると、顔を隠していた比礼のような長い布を外し、鋭い目で白扇たちを見下ろした。

「随分と遅かったな。おかげで待ちくたびれた」

不遜に言い放ち、岩の隙間に刺していた鞘入りの剣を引き抜き、無造作に飛び下りて来た。十尺以上は優にあった筈だが、着地の際になった音はごく小さく、立ち上がるその姿は軽やかだ。

「義勇軍鮮華の盟主、兎辰白扇はお前で間違いないか？」

ずいと剣を突き出し、まっすぐに白扇を指し示す。

「そうだ。私が白扇だ。貴殿は……？」

この男は明らかに白扇たちを待っていた。

「俺か？ 俺は応唯（おうい）錬清（れんしん）。ただの風来坊だよ」

「応唯、錬清」

名を口の中で反芻する。聞き覚えはない。それなりの武芸者なら、例え風来坊であっても名は知れている筈だ。改めて容姿を見る。黒ずんだ比礼を肩に掛け、纏った衣服は薄汚れているが、元々の仕立ては悪くないようで、ほつれはほとんど見られない。特異なのはその髪と瞳の色か。老翁のごとき白い髪と翠玉をはめ込んだような緑の瞳。ひと言で言えば異貌。だが、不思議と違和感を感じない。

「さて、白扇」

錬清は剣を肩に負い、ゆったりと歩き始める。白扇はその姿を目で追う。

「俺がいなかったら、李庵の邑はどうなってたと思う？」

「どう、とは？」

心当たりは十分にあったが、こちらが手札を出すこともない。そう判断して、白扇は惚けて見せた。錬清はしばらく白扇の顔を見つめていたが、

「紅紗は李箆を襲った後、進路を西に取った。そして、李箆の西にあったのがここ李庵の邑だ。お前らだって、その情報が入ったからここに来たんだろ？」

「……………」

無言を送る。彼は白髪を搔くと、

「だんまりか。まあ、それでもいいが、多少は手札を見せないで交渉するのは出来ないんだぜ？」

「交渉？ 貴殿と何を交渉することがある」

「あるさ。さしあたっては李庵の安全。場合によっては李州の治安にも関わるな」

その物言いに、白扇は彼の正体を推測した。紅紗の手の者か。だとしたら、話の辻褄が合う。つまり、邪魔な鮮華を排除するためにここにおびき寄せた。こちらの出方次第では、李庵やその他の邑を襲うと暗に言っているのだ。

白扇は警戒を強め、駕刻に目で合図を送る。彼もこの男には警戒心を抱いているし、ほぼ同じ結論に至っているだろう。

駕刻が白扇と鍊清の間に割って入る。それも、武器を構えて。

「いいのか、俺を脅しても？ どうなっても知らないぞ？」

「野党の話など聞く価値もない。ここで貴様は黙らせればいいだけの話」

鋭くにらむと、鍊清は肩を竦め、

「こんなのが本当に救ってくれるのか？ ただの阿呆じゃないか」

訳の分からない呟きを漏らしている。だが、もはや訊く意味もない。もう一度駕刻に合図を送ると、一つ頷きが返り、

「せいっ！」

長大な矛がほとんど前動作なしで鍊清に突き込まれた。手練れならこれでやられることはないが、距離は取れる。そう思っていたのだが。

「とめ、た……？」

渾身の一撃という訳ではないが、駕刻の力は相当なもので、小岩なら軽々と砕いて見せるというのに、鍊清は肩に負っていた剣の鞘で矛の一撃を止めていた。

「力任せ、という訳でもないみたいだが……それでも力に頼りすぎ、だな」

最後の言葉と同時に剣が動き、矛に絡みついたように見えた。実際は滑らかな動きで矛の動きを上から抑え込んだのだが、一瞬固い筈の剣が蛇のようなしなやかさを得たかのような滑らかさ。

只者ではない。そう実感した途端、悪寒が襲う。万が一にも駕刻が遅れをとるとは思えないが、代償なしに討って取れる相手ではなさそうだ。その証拠に、蒼刑も腰から短刀を抜き、臨戦態勢に入っている。

「兄者、お下がりを」

「わかった」

大人しく後ろに下がり、自身も腰から剣を抜く。重いものは扱えないので、細身のものだが、技量にはそこそこ自信がある。

「勘違いもほどほどにしとかないとさ——」

矛を抑えていた剣をどかし、後ろに半歩下がる。

「余計な手間かかるだけだって」

柄に手がかかり、一瞬で鞘走る。

現れた刀身は黒一色。刃の部分ですら黒い、あり得ない色の刀剣。

「まあ折角だし、味見とするか」

鍊清の顔に獰猛な笑みが浮かんだ。

鍊清は思わず笑みが浮かぶのが止められなかった。

歯ごたえのありそうな敵。それ以上のご馳走はない。

だから、手にした剣を振るい、その『味』を確かめる。

敵の名は知っている。治尚駕刻。鮮華の誇る武芸者で、いまや彼なしでは彼らを語れない程の存在。下手をすれば、盟主である白扇以上に崇められている存在だ。

「ははっ！」

切り込んだ黒の刃、『悪食』（あくじき）の一撃を駕刻は矛の柄で受け流し、返す一撃を首筋に打ち込んできた。当たれば致死性の一撃に、だが、鍊清は怯まない。

受け流しはもろに衝撃を受けない分、上手く流さないと、勢いが残ったままだ。つまり、移動は続いている。

鍊清は流れる身の方向へさらに重心を傾けて半ば転ぶように、しかし、決して転ぶことなく滑るように移動をしてのける。

出た先は相手の真横。矛を振り下ろした直後の、隙が多い姿勢。

だが、鍊清は切り込まなかった。そのまま横をすり抜け、背後で姿勢を整える。

「なぜ斬らない？」

駕刻は不可解な表情を隠しもせずに問う。

「横から斬るのは趣味じゃない。ただそれだけだ」

「貴様の趣味に救われた訳か。しかし、俺とて武芸者の端くれ。一撃は見舞って見せたいものだ」

「それ、勝負の意味を履き違えてないか？ 今やってるのは殺し合いだぜ？」

「なら、何故殺そうとしない？ 先程からの攻撃を見ると、俺が避けるのを見越して攻撃をしている。何故だ？」

「だから、殺し合いだって言ってるだろ？ わからねえ奴だな。じわじわ鬨って殺す。それが俺のやり方だ」

刃を突き付け、

「だから殺し合おうぜ？」

だが、駕刻は動かなかった。真意を確かめるように鍊清の瞳を見つめ、そして、一つ溜息をつく。

「遊びに付き合う程暇じゃない。お前の真の目的はなんだ？」

「さっきから言ってんだろ？」

わからない奴、と鍊清は呟くが、もはや駕刻は取り合わなかった。

「なら、何故殺気がない」

そう問われた途端、鍊清は興が冷めた。だらりと腕を下ろし、『悪食』を放り投げる。それは駕刻の前の地面に刺さった。

「つまんねえの。ほんとにこんな奴らでいいのかよ」

鍊清は吐き捨て、地面を蹴る。その身は数尺離れていた白扇の元に一瞬で辿り着き、その首筋に、白い刃を突き付ける。

「くう……」

白扇は呻くが、顔を上向けにするような角度で刃を当てられているため、上手く声を出せない。

鮮華の盟員は色めき立ち、駕刻は憤怒に顔を赤くさせる。

「じゃあ、もう一度取り引きと行こうか。なあ、白扇？」

空いた左手で白扇の頬を撫でる。

「李州の、いや、清香帝国の行く末を決める取り引きをしようじゃないか」

‡

白扇は首筋に白刃を押し当てられながらも、心は平静を保っていた。無論、仰け反らざるを得ないため、体勢としては苦しいのだが、恐怖はない。

「ちょ、ちょっと」

軽く剣に手をかけ、少し下ろすように目で訴えると、鍊清は舌打ちしてから剣を完全に引いた。その剣は背中に括りつけられていた鞆に収まり、翠の瞳が白扇を見据える。

「貴殿は何者だ？」

喉をさすりながら問うと、鍊清は少し距離を置いて、未だに警戒心を緩めない駕刻たちを見回してから、

「俺は鮮華を導くために使われた。故在って遣わした馬鹿の名は言えないがな」

遣わした、と言いつつも、その者に対して平然と馬鹿と言えるのは何事だろうか。

「導く？ 我々をか？」

「そうだと言ってるだろ。白扇は耳が悪いのか？」

口の悪さに反応しそうになったが、あくまでも平静を保つ。聞かなくてはならないことは山ほどありそうだ。

「では、まず問おう。貴殿が最初に言った、李庵の安全と李州の行く末とは何の意味だったんだ？」

問いかけに、彼は付いてくるように手で示し、そのまま無造作に歩き出す。一瞬、付いて行くのをためらったが、畏の様子はないし、彼自身、殺気がない。

付いて行った先は大岩の反対側。先ほど白扇たちがいた位置からは死角となっていた位置に、無数のものが転がっていた。いや、ものと形容してはいけない。それらはまだ息のある人間で、だが、体のあちこちから血を流していた。

血の臭いの正体をようやく理解し、そして、視線を鍊清に転ずる。

「この者らは？」

「紅紗の奴らだ。俺が待ち伏せて、殲滅した。ほら、そこに炉火が転がってるだろ？」

言われた方を向くと、多数の体に半ば覆い隠されながらも、確かに噂で聞き、人相書きにも描

かれていた炉火の風体によく似た男が横たわっていた。

つまり、これは紅紗の本体。しかし、圧倒的に人数が少ない。

「紅紗がこれだけの人員の訳がない。別働隊がいるはずだ」

しかし、鍊清は喉の奥でくつつつと笑うと、

「李箒で狼藉を働いていた紅紗は、略奪した食べ物を食べて腹を下し、その隙をとある馬鹿が強襲。命からがら逃げてきた残る人員は、この俺がここで待ち伏せて切り捨てた。はは、ざまねえな」

さも愉快そうに笑うが、その内容は決して笑えるものではない。数年に渡り清香を苦しめてきた悪賊がたった数日で壊滅しなければならない程の打撃を与えうる存在とはなにか。今日の前にいるこの男もそうであるのだろうし、彼に馬鹿と言われつつも、李箒にて紅紗を強襲し、ほとんどを壊滅に追い込んだ人物もそうなのだろう。無論、一人でやったとは言わないだろうが、それでも紅紗がそこにいるのを知り、見事敗走に追い込んだのは確かなことだ。

「もしや、その食あたりも貴殿らが仕組んだことなのか？」

「それは想像に任せるぜ。なにせ、俺も実際を見た訳じゃなく、文鳥で知らされただけだからな」

白扇はそっと溜息をつき、炉火を見遣った。

「駕刻、全員を縄で縛れ。刑務官に引き渡す」

「わかった」

駕刻は鍊清を横目で見ながらも、馬に括りつけてあった縄を取りに向かう。その代わり、蒼刑が近くによって来て警戒をする。

「蒼刑、いい。こやつは戦う気がない」

「だけど……」

「私がよいと言っているんだ。顔を立てると思って引いてくれ」

「……わかったよ。だけど、後悔しても知らないぞ」

重ねて頼むと蒼刑は小刀を仕舞って少し距離を取る。しかし、警戒心だけは隠していない。

「はは、嫌われたものだな。まあ、そのくらいの方が張り合いがあっている」

こやつもこやつだ。すべてを悦楽にしまおうかというような心の持ちよう。先ほどの戦いも殺し合いではなかったが、明らかに楽しんでいた節がある。

再度の溜息をついていると、駕刻はその膂力を利用して紅紗の連中をひとまとめに縛り上げてしまった。

「しかし、ここから李川に戻るには時間も遅いな。かといって、この人数が李庵に滞在するのも気が引ける」

見たところ、李庵は裕福な邑とはいえそうもない。百人が滞在すれば、金を落とすことが出来ても確実に作物を消費するのは目に見えている。そうなれば、彼らの生活を圧迫するのは必至だ。

「並足でもいい。少しずつ戻ればいいだろう。なんなら途中で野営してもいいな」

「だから、時間が遅いし、第一食糧もない。いくら並足とは言え、消耗はするのだぞ」

「おいおい、白扇は目も悪いのか？」

口の悪さにむっとして彼の方を見ると、とある一方を指差している。その先を追うと、そこには革製の袋がいくつも転がっていた。

「食料だ。こいつらがもともと貯蓄していた分だから、食あたりはしないだろ」

「……………」

半目になって彼を見たが、そんな視線を意にも介さず、にやりと笑って見せた。

「敵ではないと信じよう。しかし、貴殿の目的が不透明なままでは、協力は保証しない」

「勘違いするなよ。協力するのは俺だぜ？」

一足で十尺以上を跳んで見せた錬清は軽々と革袋をいくつも担ぎ上げ、白扇に手を振った。白扇も今は彼に対する詮索を諦め、馬にまたがる。

「では、一度李川に戻る。野営もあるだろうが、幸い食料は手に入った。では、行こうか」

百人が応答を返し、砂の大地を賑わせる。

行きは駆け足だったが、帰りは馬に無理させるのを嫌い、並足でゆっくり行く。なにより、思わぬ同行人が増えた。

白扇は荷物を背負い、しかし、笑みを隠さぬその横顔を見て、そっと三度目の溜息をついた。

李川にたどり着いたのは翌日の夕刻だった。幸い、食あたりにもならず、夜盗の類と遭遇することもなく、道行は安泰なものだった。

ただ、不平を挙げさせてもらおうと、鍊清の他を顧みぬ傍若無人な振る舞いに鮮華が振り回されたことだろう。

具体的に言うと、鍊清は休息を取るために馬を止めるたびに誰かしらに切りかかろうとするのだ。油断も隙もあったものではなく、鮮華の者は休息を怖がる羽目になった。

李川では何事もなかったようで、留守を任せていた理督たちは邑の守備軍と共同して警護に当たっていた。白扇が戻ったと知るや、すぐさま総員が集合し、邑の入り口は大混雑することとなった。

「白扇殿、よくぞご無事で。して、紅紗の連中は？」

理督が進み出て、白扇の荷物を受け取りながら問う。白扇は視線で背後を示し、駕刻が縄で引いていた男たちを目にした理督は目を丸くし、ついで笑い出した。

「これはこれは……」

すぐさま彼は刑務官を呼ぶように部下に命じ、走り出した部下を目で追う。

ついで彼は見慣れぬ男、鍊清に不思議そうな顔を向ける。

「応唯、鍊清殿ですか。何故ここに？」

「？ 知っているのか、この男を」

白扇が驚いて問うと、理督はあいまいに頷き、

「彼はとある邑主のお抱えでして。言葉を交わしたことはないですが、一度政官の折に見かけたことが」

「そう、か……」

改めて鍊清に目を向ける。ということは、彼を遣わしたのはその邑主か。

「鍊清、お前の主はどここの邑の邑主だ？」

「あ？ 俺に主なんていねえよ。仕えるがらじゃないのはわかるだろ？」

それはそうかもしれないが、だが、邑主のお抱えというなら、仕える以外になにがあるというのだろう。

「強いて言えば、力を貸してやってる、そういうこったな。単なる居候だよ、居候。あいつだって俺を雇ってるとは微塵も思っていないだろうしな」

カカと笑い、理督の顔を見る。

「俺もあんたのこと覚えてるぜ。一人、眼の感じが違ったからよく覚えてる。お前の眼は理想を見てる。そうだろ？」

「理想、ですか……私にそんな大したものはありませんよ」

穏やかに返す理督に鍊清は皮肉げな笑みを浮かべて言う。

「そういうことにしといてやるよ」

そうこうしているうちに刑務官が十名ほどこちらに向かってやってきた。手には鉄鎖と錠前。

彼らは縄で縛られた紅紗の連中を立たせ、その足と手を他の者をつないで一列にしていく。

「紅紗の確保、協力感謝します。これで少しは清香も安泰になるでしょう」

一礼をしてから紅紗を引っ立てて行く。それを見送ってから、鍊清に目を向け、

「して、これからお前はどのようなのだ？」

「まずはここの周辺の情勢を調べるさ。そのあと、俺は一度馬鹿のところに戻る」

「それは一人でか？」

「何を言っている。何のために俺が李州くんだりまで来たと思っているんだ？ 当然お前たちも一緒にだ。ついでだから、調べごとにも付き合ってもらおう」

相変わらず傍若無人だが、もはや白扇も慣れてきた。駕刻も諦めたのか、先ほどから口を開いていない。まあ、彼はもとより寡黙な質だが。

「では、宿屋を探さなくてはな。ここについてすぐに紅紗目撃の報が入ったためにまだ決まっていないのだ」

「あ、それでしたらすでに二人分は用意できておりますよ。ただ、鍊清殿がいるとは思わなかったもので……」

「気にすんなよ、理督のおっさん。俺は適当に探すからよ」

馴れ馴れしく肩を叩く彼に苦笑を見せながら、理督も嫌がってはいない。

「どこに泊まるかだけ、教えてくれ。夜に会いに行く」

理督が場所を教え、白扇たちと鍊清は一度そこで別れた。

宿屋に向かう際中、理督に彼の詳細を尋ねると、

「見た目通りの風来坊ですよ。もっとも、腕はかなり立つそうですが。彼が仕えて、いや、居候しているのは、祁州の央である祁央の邑主ですよ」

「祁と言えば、最近はかなり安泰だそうだな。それはその邑主あつてのことか」

「ええ、恐らく。実を言うと、鍊清殿の他にももう一人いらっしゃるのですが、表に顔を見せないせいで噂だけしか聞いたことがありませぬ」

「もう一人、か……」

その人物も鍊清みたいな傍若無人なのだろうか。多分、今後縁ができるだろうから、そうだとしたら少々憂鬱ではある。

「今後についての詳しいことは宿屋に入ってから話しましょうか。祁や鍊清殿との間で話し合うことは色々あるでしょうしな」

「そうだな……」

白扇は薄雲のたなびく空を見上げ、今後に想いを馳せた。

‡

一方、一度白扇と別れた鍊清は宿屋を探すでもなく中央通りをはじめとする各所を練り歩いていた。

その顔は白扇たちに向けていたものとは違い、真剣で、そして、慈愛に満ちていた。

彼は一軒の食事処を見つけ、ふと足を止めた。特段、目を引く佇まいではないが、食欲をそそる香りが辺りに広がっていた。ここならよさそうだ。

「店主、ここはなにを出す店だ？」

軽い足取りで近付き、仕込途中の店主らしき体格の良い男に問うと、彼は目を弓にし、

「羊肉の羹（あつもの）でさあ。兄さんは旅の人かい？」

「ただの風来坊だよ。羊か。あいにく、食したことがない」

「羊はちょっと癖がありやすが、香草と煮込めばそれもそんなに気にならねえってことで、羹にしてるんでさ」

なるほど。鍊清は羊肉はおろか、肉の類をほとんど食べた経験がない。魚もしかりで、もっぱら菜食だった。

「すぐにもらえるか？」

「あとちょっと待ってくれば、アツアツのを出しますぜ」

「わかった。待とう」

勧められた席に腰を落ち着け、その際に邪魔になったので腰の双剣を台の上に置く。すると、角度的に先ほどまで見えていなかったのだろう、店主が興味深そうにその双剣を見る。

「二本あるけど、一本は予備かい？」

「いや、予備ではない。使う用途が少し違うからな」

「へえ……剣士ってのはよくわからん。最近はどんな仕事が多いんだ？」

「まあ、平和な場所には縁のない存在だからな……今は盗賊の検挙に駆り出されることの方が多いんじゃないかね」

「ああ、そうか。最近じゃ紅紗って連中が幅を利かせてるそうじゃないか。物騒なもんだよ」

当然ながら邑の人々は紅紗が滅んだことを知らない。

「店主、一ついい話をしてやる」

そう切り出すと、話好きらしい店主は身を乗り出してきた。その間も調理の手は動いていた。器用なものだ。まあ、こういう店の人間は作業をしながら客と世間話をする人が多いのだろう。

「鮮華という義勇団が、紅紗の頭領を打ち取ったという話だ。いい話だろ？」

「それは本当か？ 鮮華っていや、昨日この李川にやってきた奴らだよな……ずいぶんとあっさりやったもんだな」

「そりゃ、南の祁州のお抱えって噂だからな」

「祁州の！ そらすげえよ。義勇軍たって、結局は官軍の下働きみたいなもんで、契約はするけど、召し抱えられるなんてそうそうあることじゃないだろ？」

「それだけ腕が立つってことだろ？」

「だろうなあ……オレはずっと休みなくこの店で働いてるから見たことねえけど、鮮華の盟主って顔のいい若い男なんだってな。店に来た客が噂してたぜ」

「ほう……頭の切れを考えると、もう少し年が行っているような印象もあるが、そうなのか」

鍊清はわざととぼけてみせる。

「ああ。なんでも、女のように綺麗だとか」

「だとすると、武芸に秀でて、というわけではなさそうだな。軍師的な立ち位置かもしれない。そして、そいつを支持する腕の立つ武人ども。ははっ、こいつは国が動くかもしれない」

「国が動くかどうかはオレみたいなしがない店主にはわからんが、その調子で賊どもを捕まえてくれりゃ、平和にはなりそうだな」

期待のこもった店主の言葉に鍊清は深く頷く。そうしてもらわねば困る。

「ほいよ。自慢の一品だ。量はおまけしといたから、たんと食べよ。あんただって剣士なら、人ごとじゃねえだろ？ 力つけといてもらわなよ」

「ありがたい」

椀は長年使っているせいか汚れているが、不潔なほどではない。中身を見るととろみの付いた汁の中に肉と野菜がごろごろ入っていた。匂いも食欲をそそるし、今が飯時じゃないだけで、普段は繁盛しているのだろう。

一口汁を飲むと、肉のうまみが染み出した濃厚な味わいが口を満たす。とろみが熱を逃がさないせいか、ひどく熱いが、それ以上に、

「旨いな。これだけで三食いけそうだ」

「そりゃうれしいね。作ったかいがあるよ」

正直な感想に店主が相好を崩す。

鍊清は当初の目的は少々忘れ、椀の中身を食す。羊肉のくさみ、というのは鍊清にはよくわからないが、確かに香草が効いていて気になるようなものはない。

あっという間に椀の中身を空にした鍊清は満足の息をつき、

「お代は？」

と問うと店主は首を振り、

「いや、今回はいいさ。ただ、次来た時には払ってくれるとうれしいね」

彼は真剣な顔になり、

「だから、絶対に死ななくてもっかい来てくれよ」

鍊清は思わず呆然としてしまい、それから笑い出す。

「安心しろよ。俺は殺しても死なない男だ。次がいつになるかはわからないが、おっさんこそ繁盛しすぎで目を回すなよ」

「目を回すような忙しさなら大歓迎だよ。それじゃ、元気でな」

差し出された大きな手を握り返し、鍊清はその店を後にした。

食事をしたかったのは確かだが、あの店には別の用があった。あの店である必然性はないが、あそこなら鍊清の目的も果たせそうだったからだ。

目的とはつまり、情報操作。食事処には旅人も含め、多くの客が立ち寄る。うまい店ならなおさらだ。そんな店に鮮華の評判を流しておけば、世間話とともに鮮華の評判は語られ、後々尾ひれまでついて他の邑や州に知れ渡るだろう。

現状でも十分有名な義勇団ではあるが、名はあっても実はなかった。そこへ、やってきて早々に紅紗を捕まえたという実がつけば、民草の注目も集まるだろう、ということだ。

祁州のお抱えの件は現状では全く根のない話だが、いずれ鍊清がそう仕向ける。その前にちょっと噂話を流しただけの話だ。

種を蒔き終えた鍊清は存外に美味しい食事と出会えたことに満足しながら、ゆったりとした足取りで白扇の泊まる宿屋へと向かった。

白扇は汗と土で汚れた体を湯あみで綺麗にしようと思ったが、如何せん、この宿屋の個室にそのような設備は備え付けられていない。

とすれば、共用の場所を使う以外にないのだが、

「駕刻、いるか？」

「む？ 兄者、どうかしたのか？」

銚の手入れをしていたらしい彼はすぐに隣の部屋から顔を覗かせる。

この宿屋は隣室との間に扉があり、頼めば行き来できるようになっていて、主に頼んでそうしてもらった。反対側の部屋には鈴が宿泊している。

「ああ、汚れて気持ち悪いから、湯あみをしたいと思うのだが……」

その言葉で察したのか、駕刻は厳つい顎に指を添えて考え込む。

「であれば、装備を解いて、普通に行けば気づかれますまい。下手に俺がついていくよりは、鈴殿に頼んだ方が怪しまれもしないでしょうし」

「やはり、その方がいいか。鈴の腕を信頼してないわけではないが、やはり女子というのは狙われやすいからな」

「この邑なら、そう警戒することもないでしょう。なにより、修刑殿や蒼刑もいる」

「そう、だな……」

白扇が納得を見せると、駕刻は頷きを送って自室へと引っ込んだ。

白扇は一度鈴へと湯屋へ行くことを告げ、そして、未だに身に着けていた軽装の甲冑を脱ぐ。着脱は簡単なものなので、一人で脱ぐことが可能だ。

そして、布のみの軽い姿になると、最後に編んで団子のようにしていた髪を解く。すると、編んだ形に癖のついて波打った髪が背中に広がる。

「ふう……」

本来の自分の姿。まだ、解くべき部分はあるが、それは湯屋に行ってからすれば十分だ。

隣室へ声を掛けると、鈴も支度を終えたところらしく、武器も置いた軽装で姿を現した。

「じゃ、行こっか」

快活に笑い、白扇の腕を引く。

白扇もなされるがままに腕を引かれ、ついていく。

「にしてもー」

鈴の視線が無遠慮に白扇の肢体へと注がれる。

「いつもの格好だとやっぱり違って見えるわね」

「そうでなければ困る」

白扇が言い返すと、鈴は呆れを見せ、

「その口調。こっちの格好のときぐらいは普通にしゃべりなさいよ」

「あ、うん。そうだ……いえ、そうね。これで大丈夫、よね？」

「ええ」

実を言うと、白扇は世間に対して性別を偽っている。本当は女だが、義勇軍の盟主であることを続けていく上で、女という性別は不利に働く。そう、駕刻と話し合い、普段は男として過ごすことを決めた。

不都合は多いが、鈴のような理解者や、それを気にしない修刑や蒼刑のおかげで今までうまくやってこれている。

だが、不安要素が一つ。鍊清のことだ。

恐らく、彼は白扇が本当は女であることを知らない。そして、女であることを知ったらどういう行動を取るか、だ。

黙っているならよし。もしも、それを吹聴するようならば、

「討つしかない、か……」

「誰をよ。というか、難しい顔してたと思ったら、いきなりなに？」

「ああ、いや。応唯鍊清のことを、な」

「ああ、彼ね」

鈴も少し思案顔になり、しかし、

「なるようにしかならないでしょ」

と、あっけらかんとした態度で言い放つ。まあ、それはそうなのだが、そうなったときのことを少しも考えないのは無謀である。多少は対策を練っておいた方がいいとは思っているのだが、しかし、それは白扇の都合か。

いくら白扇が性別を偽っていることに理解を示してくれているとはいえ、全面的に賛同している訳でもない。

「まあ、それもそうね」

だが、結局はなるようにしかならないのかも知れない。特に、あの応唯鍊清という男に対しては。

彼のことを頭の片隅に置き、しかし、白扇は久しぶりの解放感に身を委ねながら、鈴との話を楽しんだ。

湯屋に着き中を見るが、ほとんど人はいない。営業中であるから、利用はしているようだが、まだ込み合うには早い時間のようだ。

受付にいた肉付きのいい女性に代金を前もって支払い、女性用の脱衣所へと向かう。

「さて、これで汚れともおさらばね」

生まれつきの傭兵である鈴でも、さすがに汚れたままというの気持ちが悪いのだろう。

「お先」

彼女は手早く衣服を脱ぎ捨て、藤編の籠に突っ込むと、我先にと浴室へと駆け込んでいった。

「まったく……」

白扇は苦笑を浮かべ、そして、自らも衣服を脱いでいく。上衣の下には白い細布が巻きつけてあり、それは彼女の胸を押しつぶしている。

白扇はその細布を丁寧に外していく。また使うから、汚く外すと後が面倒なのだ。

すべての細布を取り去った胸には、大きくはないが、女性らしい形のいい双丘がある。

白扇はそれを煩わしいと思う反面、女性で居続けたいとも思っている。

そんな相反するような思いを振り払い、白扇は浴室へと足を向けた。

†

湯あみを終え、湯屋が込み合い始める前に出てきた二人は、体の火照りを冷ますために少し散歩をすることにした。鈴の衣服はややだらしなくはだけている。鈴はその少し日に焼けた健康的な色香で道行く男性の目を引き付け、白扇は凜と伸ばした背筋と涼やかな目元、しかし、熱で火照った肌という組み合わせで、これまた衆目を集めていた。

そんな美女二人に、ほとんどの男は気おくれを感じていたが、その中に、

「おいおい、姉ちゃんたち」

と、若干呂律の回ってない声で呼びかける男が二人。足元もふらついており、この時間から随分な量の酒気を帯びているようだ。

「なによ、あんたたち」

前に出たのは鈴で、腰に手を当てて、男たちを睥睨する。

「なーに、少しあそばねえかって話だよ。いいだろ。あんたらも肌ほてってしかたねえんだろ？

だったら、休めるいい場所知ってたよ。な？ いっしょに行こうぜ？」

どうやら、男たちの目的は白扇たちの体らしい。目の付け所は悪くない、と自負を抱きながらも、同時に、相手が悪かった、と憐れみを感じる。

「あんたじゃ不足よ。もうちょっと男磨いてから出直してきなさい」

鈴のすごい言葉に、なおも言いつのろうとする男を無視して、白扇は彼女の腕を引く。

「帰りましょ」

力づくで除けることも可能だが、荒事にはしたくない。ここは黙って立ち去るのがいい。そう思ったのだが、腕を掴まれ、

「おい、だんまりでさよならか？ お高くとまってんじゃねえよ、この売女が」

「え？」

耳を疑った。見ず知らずの男から投げつけられた、棘のある言葉。しかも、女性を侮辱する単語を含んだ。

思わず、怒気が膨れ上がり、腕を掴み返して捻ってやろうかと思った矢先、

「はいはい、何やってんの？」

軽薄、とも取れる声が割って入り、たやすく白扇と男の腕を引き離した。

わずかに香る血の匂いとそれに混じってかすかに花の匂いがする。

顔を上げると、毛先だけが黒い白髪を持つ異貌が見下ろしてきていた。そして、その視線がついとよそへ逸らされる。

その視線を追うと、そこには困り顔の蒼刑とそして、そのさらに向こう側には背景に溶け込むような気配の薄さで修刑が立っていた。

「全く、帰りが遅いからと思って探しに来てみれば、こんなところで男と密会？ 俺は悲し

いねえ」

顔を手で覆い、嘆く素振りを見せる。その際、目配せが蒼刑へと送られ、それを正しく受け取った彼は頭を掻きながら、

「鈴、お前なんつー恰好してんだよ。まったく、そんなだから俺はお前から目が離せないんだっつの」

「な、なによ。わたしの勝手でしょっ」

「まあ、格好云々でいまさらごちゃごちゃ言う気はねえけどさ。でも、男遊びは観念な」

「遊んでない。こいつらが付きまとしてきただけっ」

語気も強く言うと、鍊清はその顔に獐猛な笑みを浮かべ、

「ほう？ とすると、こいつらは俺の女に手を出そうとした、ふてえ輩、という訳か。斬ってもいいのかね、こりゃ」

腰の双剣に手が伸び、刀身がわずかに引き出される。陽光を眩く反射する白刃。

「いや、待てよ。俺は、俺たちはちょっと遊ばないかって誘っただけで——いきなり斬られるなんてゴメンだぞ？」

一気に酔いが醒めたのか、男は引けた腰で後ずさりながら、慌てて弁解する。

「じゃあ、もう手を出さないって誓えるか？」

「ち、誓うから。その女だけじゃなくて、もう軽々しく女に話しかけないからっ。それでいいだろ？」

「本当に誓うんだな？」

鍊清が顔を寄せると、折れるんじゃないかという勢いで首が縦に何度も振られた。

「おし。じゃあ、とっとと去りな。そして、早めに家に帰るんだな」

「わかったよ。いくぞ、お前」

「あ、ああ……」

男二人は滑稽な格好で逃げ出した。それを見送り、鍊清は剣を鞘に納める。

「あういう輩は好かん、生理的に」

「だからって、やりすぎなんじゃねえか？」

蒼刑の言葉にしかし首を振り、

「安全な場所で生きてきて、刀傷沙汰なんて自分の身に起こることと思ってなかったからだろ。平和すぎるのも難だよな」

「……………」

蒼刑は口を閉ざし、やれやれと首を振った後で、改めて白扇に視線を投じる。

「どうしやす？」

恐らく、鍊清のことだろう。白扇は手で彼を制し、鍊清に向き直る。

「おい、鍊清」

名を呼ぶと、彼はゆったりとした動作で振り向き、そして、首を傾げる。

「あれ？ なんて俺の名前知ってんの？ そっちの勝気な方ならわかるけどな……李庵にいたし」

「勝気で悪かったなっ」

「悪いなんて言ってないだろ？ むしろ、そういうのは好きな方だぜ？」

語気も荒く噛みついた鈴に対して、軽薄ともいえる言葉を返す。

「で、あんたは？ 李庵には来なかったけど、鮮華の盟員か？」

この男がとぼけているのか本気なのか測り兼ねた。しかし、このような公衆の面前で名乗りを上げることもない。

肯定の頷きを見せると、彼はにやりと笑い、

「知ってるだろうが、俺はこれから鮮華と一緒に行動することにした応唯鍊清だ。よろしくな、名前を知らない娘さん」

「ええ、よろしく」

笑顔が引きつっていないかを心配したが、すでに鍊清はよそを向いている。

「じゃあ、俺はちょっと用があるからこれでな」

軽く手を振り、こちらの挨拶を待たずにさっさと歩き出す。

「ありがとうっ」

まだ礼を言ってなかったことに気が付き、その背中に告げると、背中越しに手を振られた。

その姿が雑踏に紛れ、見えなくなると、白扇の全身から力が抜けた。

「まったく……なんなんだ、あの男は」

「さあ、知りやせんよ。兄貴なら多少は詳しいでしょうがね」

「なら、後程問うことにしよう。それよりもまずは」

「宿に戻るのが先かしらね？」

「ああ」

口調が男のものに戻っているのを感じたが、直す気もなかった。

鍊清という男、一緒にいるだけで妙に疲れる。

蒼荊を伴い、一度宿に戻ることにする。ふと修刑がいたはずの位置を見るが、そこには誰もいなかった。

「やあ、かわい子ちゃん」

鍊清の第一声に白扇を含め、宿屋に集っていた面々は顔をしかめた。唯一表情を動かさなかったのは第三分隊隊長の蒼刑だけで、彼は普段から表情に乏しいので内心を推し量るのは至難の業だ。兄弟である修刑でもわからないらしい。

「お前、さっきのはわざとだったのか？」

改めて問うまでもないだろうが、一応真意を聞いておきたい。そう思ってたの問いだったのだが

「その方がお前らにとって都合がいいだろう？ 何せ、盟主を男と偽って活動しているんだから」

「私たちの都合を考えてくれた、という訳か。それはありがたいのだが……」

「だが？」

笑みで問い返してくる彼にため息をつき、

「少々やり口が暴力的ではなかったか？」

「ああ、そういうことか」

鍊清は腰の双剣に触れると、やや苦い顔で、

「どの道、こいつじゃ人は殺せないしな」

「どういうことだ？ それは紛れもなく真剣だろう？」

「ああ、模造剣ではないさ。駕刻、ちょっと使ってみてくれるか？」

そう言って彼は双剣の内、黒い刃の方を抜いて駕刻に渡す。

「しかし、使えと言われてもな……」

「俺の腕を斬ってみればいい」

袖をまくった腕をすっと伸ばす。

「正気とは思えんな」

「いいからやれよ。俺の正体についても説明しときたいんでね」

「ならば」

長くはない刃を上段に構え、駕刻は一気に振り下ろした。結果はなにもなかった。

腕を断つ感触を覚悟していた駕刻は空振りのような感覚に体勢を崩しかけ、そして、鍊清の腕には傷一つない。

「斬れないだろ？」

「ああ。しかし、これはなんだ？ すり抜けた、のか……」

「いや、斬ってはいるさ。ただ、斬る物が違うんでな」

駕刻から黒刃の剣を返してもらい、鞘に納める。

「この『悪食』は人に宿る悪意を斬り、そしてその刃の内に吸い取る。だから刃は人の悪意で黒く染まってる」

「まるで仙術だな……」

正直な感想を述べた白扇だったが、鍊清はにこりともせずに、

「正真正銘仙術だからな」

そう、大して面白くもなさそうに告げた。その内容に、鈴が目を見開く。

「つまり、それは宝贝ってこと？」

「一応。ただ、そう名のある仙人が造ったわけじゃない」

仙術。そして宝贝。

仙術はまさしく仙人と呼ばれる人を超えた存在が行使する超常の力のことだ。何もないところから炎や氷を生み出し、大地を揺り動かすことも出来ると言われているが、実際に目にしたことはない。

宝贝はその仙人が造った物で、仙術のような力を内包した物品だ。形はその力に合わせて千差万別で、その数もどれだけ存在しているのかはわからない。ただ、武器としての性能は人間の造ったそれを遥かに凌駕するらしい。

「つまり、お前はその仙人に通じている。そういうことか？」

「ああ。俺の武術の師匠はそいつだよ」

傍若無人なのは相変わらずで、人を超えた存在であるはずの仙人でさえそいつ呼ばわり。その肝の太さに感心していいのやら、呆れればいいのやら。

「では、お前が居候しているという祁央の邑主も仙人に通じているのか？」

「ああ……そうか。詳しく話してなかったな、その辺を」

そこで一度言葉を切って少し考え込む。

「今すぐ会ってもらうのが手っ取り早くはあるが、事前に今の状況を伝えておく」

「ああ、頼む」

面々が頷いたのを見て、鍊清も頷く。

「まず、俺が居候しているのはお前らが知っている通り、祁州の央邑、祁央だ。その辺は理督のおっさんから聞いたんだと思うがな」

「ええ、私が知っている限りのことは。と言いましても、貴方が祁央にいることぐらいですがね」

「まあ、そんなもんか。じゃあ、ここからはお前らにとって初耳となることか。実をいうと、俺は邑主のところにいるわけじゃない。その一人娘である、宗祁（しゅうぎ）奏歌（そうか）のところだ」

「そういや、宗祁家には一人娘がいるって話でしたね。つまり、あんたは姫様の家に転がり込んでるってわけか」

修刑の情報は白扇も耳にしたことがある。まあ、邑主の家族の名が外に知られるのは珍しいことではない。何より、基本的に家督は相続されるものだ。

「で、その奏歌だが、世の乱れを愁いでいてな。それで、今回の紅紗討伐と相成ったわけだが……」

白扇たちが卓に広げていた地図のとある箇所に指を置く。そこは帝都である清央から見て南にある州で、

「実は、まだ力のある勢力が存在している。南の森州において森の民と呼ばれる者たちだ」

「初めて聞くな」

「恥ずかしながら、私もです」

そう白扇と理督が呟き、互いに顔を見合わせる。その様子を布で覆ってない方の目でちらりと見た蒼刑は、

「森の民はもともと南方遠征軍の崩れ者の集まりです。しかし、紅紗のように好き勝手暴れているわけではなく、南方での活動において通行料と称して一定の額の金銭を旅人などから徴収しているだけです」

「詳しいな」

「情報を司るものとして、当然のことです」

鍊清に目礼を送り、蒼刑はそれきり黙りこんだ。

「しかし、そういう者なら刑務官なり軍が動けばそれで討伐できるのではないか？」

白扇は反論されるのは承知で、ごく一般的なことを述べてみた。鍊清もそれには首を縦に振り、

「勿論、そうするのが一番手っ取り早く、わざわざ北の姫様が気を揉むことじゃないだろう。しかし」

鍊清の指が森州の南端からその央邑である森央に移る。

「問題は森央の邑主、覇森（はしん）家だ」

「邑主の一家が何か問題を抱えているのか？」

「いや、そういうことじゃない。覇森は財政的に潤っていて、他の邑とも交易が盛んだ」

「もしやー」

理督が何かに気づいたように声を上げる。白扇もなにかきな臭さを感じた。

「森の民が徴収した金銭は覇森の懐に入っている。そういうことですか？」

鍊清が手を叩く。

「ご名答。そう、その通りだ。森の民は好き放題に金を巻き上げている。そして、その一部を覇森の懐に入れることによって、覇森の追及の逃れるばかりか、その威光を背にさらに好き放題に振る舞っている、ということだ」

「腐っているな」

白扇が正直な感想を言うと、鍊清は苦い笑みで、

「だから、義勇軍が動く価値がある。だが、まだまだ迂闊には動けない」

「政治的な面か？」

「それもあるが……それよりも根本的なところで、証拠がない。邑主の一家を挙げられるだけの確たる証拠がなければ、俺たちはただの逆賊として干されるだけだ」

「それは困る。しかし、奏歌殿はこの事実を突き止めた訳であろう？ ならば、証拠があると言ってもいい筈だ」

「そう簡単な話でもないでしょう」

理督が感情的になりかけた白扇の言葉に口を挟む。彼は髭を弄びながら、

「悪事を知ると、その証拠を掴むのでは雲泥の差です。知るだけなら、その現場を見ればわかります。しかし、証拠とは後々においても他者から見てそれが犯罪の印であるとわからなければならない。つまり、物が必要です。この場合、裏帳簿でもあれば挙げられるのでしょうかね……」

「おっさんの言う通りだ。つまり、奏歌の姫さんは証拠が欲しい。しかし、自由に動かせる人の数が圧倒的に少ない。その上、自身も軽々しく動けない——というのはただの嘘だがな」

台詞の最後で鍊清は笑った。

「まあ、奏歌殿の人となりについてはこの際聞かないでおこう。つまり、自由に動かせる人手が欲しいわけだな？」

「腕の立つ、な」

白扇は考え込む。悪事を知って放っておくのは性に合わない。しかし、相手が相手だ。場合によっては、逆賊の汚名を着せられて手配されないとも限らない。そのような危険に仲間をさらす可能性のある判断をすぐに下すことはできない。

「……少し、待ってくれないか？ 鮮華の者全員に聞いてみたい」

「待てるのは二日ぐらいだ。その間、俺はちょっと情報を集める。そのためにそこの蒼刑を借りてもいいか？」

鍊清に指さされた蒼刑は視線を白扇に向けて伺いを立てる。

「お前がこの男に付いて行ってもいいと思うなら行ってもいい」

「では、我は応唯に付いて行こう」

呟くように言い、視線で顔を見せる。

「なら、話はある程度まとまった。催促はしないという意味で、二日はこの宿に寄らないことにする。もし用があるならそっちから俺の宿に出向いてくれ。返事は二日後の夜にここで聞く」

「わかった。私もそれまでに総意を聞いて返答をまとめておこう」

鍊清と手を握り合う。彼は蒼刑に何事かを告げると、そのまま足早に宿を出て行った。

白扇は肩から力を抜く。随分と予定と異なってしまった。

当初は紅紗を追い詰めるための策を練っていたはずの時間は、今度は森州の政治腐敗をどう暴くかに代わってしまった。忙しいのは慣れっこだが、判断を下すのは未だに慣れない。

この部屋にいる面々に弱みを見せることはまああるが、それを全ての仲間に対して出来るかという、そうもいかない。

「疲れているなら早めに休みなさい。あたしは先に寝させてもらうわ」

鈴は一足先に隣室へと引っ込んでいった。

「では、我々も」

呟くような声でそう言い、蒼刑と修刑も出ていく。

「さて、私も考えを整理させてもらうとしましょうかね。では、よい夢を」

理督が腰を叩いて立ち上がる。

そして、この部屋には駕刻と二人になった。

「俺は兄者に付いて行くだけだ」

「ありがとう」

彼なりの気遣いに礼を述べ、寝台に寝転ぶ。

「では、俺は隣に」

「ああ。よく休めよ」

「兄者も」

巨体が静かに動き、隣室へと消えた。

考えることは多い。

だが、今は少し静かに休みたい気がした。

李庵までの往復は思ったよりも疲労を蓄積させていたらしく、白扇の意識はすぐに落ちて行った。

鮮華伝

<http://p.booklog.jp/book/46968>

著者：ラナフェリア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shbeltier9/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46968>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46968>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.